

テレビ局「マスター設備更新」を「次の15年」のチャンスにする

ローカル局がマスター更新に併せてデータ放送システムを強化する動き

今、全国のテレビ局では、地デジ化で導入されたマスター設備の更新が進められている。放送事業の根幹を成すマスターの更新は、放送局にとって大きな節目。前回の更新時からの事業展開を振り返り、次の10年間・15年間の事業をデザインする絶好の機会だ。今回のマスター更新に併せて、データ放送システムを強化し、将来のハイブリッドキャストや4K配信に向けて準備を始める一部のローカル局の動きが注目を集めている。その狙いと将来展望はどこにあるのか、取材した。（文：高瀬徹朗・放送アナリスト、渡辺 元・本誌編集長）

現在のマスター更新が決める 今後15年間のテレビ局経営

2003年12月の地上デジタル放送開始からもうすぐ15年。現在、全国のテレビ局ではマスターの更新時期に入っている。マスターの更新は、単なる放送設備の入れ替えではない。次回の更新時期までの約15年間に各社が展開するサービスのビジネスモデルを問われる節目でもある。ここでどのようなマスターを導入するかで、今後約15年間のテレビ局経営が決まるといっても過言ではないからだ。特にローカル局にとってはOTTなどテレビ局の競合事業者が台頭する中、今回のマスター更新は会社の存亡にさえも影響する局面となる。

このように重要な節目となっている今回のマスター更新だが、一部のローカル局に注目したい動きがある。系列のマスター更新の方針にただ追従するのではなく、独自判断でマスターの入れ替えに併せてデータ放送送出システムを導入するという動きだ。マスターに付属されているデータ放送システムだけではなく、別途高機能なデータ放送送出システムを導入。将来のハイブリッドキャストやそれを活用した4K映像配信、データ放送での広告配信など、本格的なデータ放送サービスを新たなビジネスの柱に育てていくという戦略的な設備投資と言える。

この注目すべき動きの代表例が岩手朝日テレビ（IAT）だ。テレビ朝日系列は今回のマスター更新では共通仕様、共同発注によるコスト削減を図る方針

のもとメーカー選定を行い、岩手朝日テレビはその中でNECを選定、最初の導入局となる。データ放送システム（局間連携システム）もマスターと同様のスキームでメーカー選定し、NECを選定した。

また、オプション/個別扱いとなったデータ放送送出システムを岩手朝日テレビとして導入を決断。選定の結果、メディアキャストの高機能データ放送送出システムとし、NEC製マスター/データ放送システムと連携させて運用することにした。

この独自の動きにはテレビ朝日系列の他のローカル局も注目しており、今後岩手朝日テレビへの視察も増えそうだ。さらに平成新局である同局の動きに刺激を受け、テレビ朝日系列以外の平成新局も注視しているに違いない。マスター更新に併せてデータ放送送出システムの新規導入を進めているローカル局は、岩手朝日テレビのほかにも出てきている。この動きはこれから全国的な広がりを見せそうだ。

「キー局集中システム」から 脱却したローカル局

岩手朝日テレビがデータ放送送出システムの導入によって手に入れたのは、ローカルデータ放送の送出能力。つまり、地域情報を含む自社発信のコンテンツをデータ放送として提供できるようになった。

ここに至る前提として、テレビ朝日系列の一般的なローカル局における従来のデータ放送設備環境に

ついて簡単に紹介しておこう。

テレビ朝日系列のデータ放送設備を支えるのはキー局であるテレビ朝日ではなく、気象情報会社として知られるウェザーニューズだ。テレビ朝日が持つテレビ朝日ニュースサーバ内の情報はもちろん、各ローカル局のニュースサーバの情報も一度ウェザーニューズ内のコンテンツニュースサーバに集められ、そこから気象情報と合わせて各局のマスターに付属されたデータ放送システムに配信される（図1）。

この方式は、ローカル局におけるデータ放送制作の負担を限りなく縮小する仕組みとして、高い支持を得た。実際、地上波デジタル化に伴う設備更新やHD化対応などの費用負担増に追われていたことを考えれば、特にローカル局にとって理想的だったと言える。

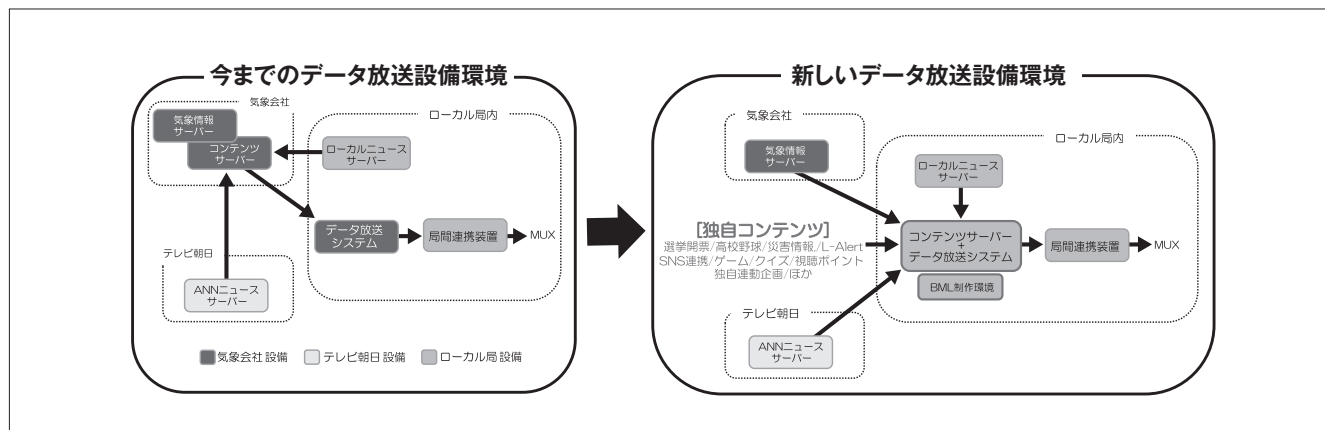
キー局・準キー局などを中心として系列全体のデータ放送制作を支えるという方式はテレビ朝日系列だけではなく、放送業界のスタンダードでもあった。今年6月に開催された「NHK技研公開」などでキー局・準キー局が示した高度なハイブリッドキャスト対応サービス提案は、初期に背負った「負担」を自局の知見、ノウハウに転換できた結果だろう。

貴重な放送独自の武器を 「眠らせたまま」で良いのか？

一方、多くのローカル局にとって、データ放送は「キー局が提供してくれるサービス」として進んでき

テレビ局「マスター設備更新」を「次の15年」のチャンスにする

【図1】 岩手朝日テレビのデータ放送は、気象情報会社のシステムから自局のデータ放送送出システムに移行した



た。テレビ朝日系列に限れば提供者はテレビ朝日でなくウェザーニューズだが、いずれにしても「基本的に自社で作業する必要のないサービス」だったことに変わりはない。

各ローカル局にハイブリッドキャストへの対応について話を聞くと「興味はあるが、どこから手をつけたいのかかわからない」という答えを耳にすることが多い。本線映像と連動、あるいは本線とは別にテレビ画面上で展開できるデータ放送サービスに対する経験値やノウハウが不足している状況は明らかだ。

今回、岩手朝日テレビへの取材の中でも、データ放送担当者から「画面内の一つの情報を差し替えてもらうだけでも、手間と時間がかかった」という声が聴かれた。気軽に番組宣伝バナーも切り替えられない状況は、心情的にデータ放送を「より遠い存在」にしてしまっていたという。

東日本大震災を経て、改めて情報提供元としてのテレビに高い期待が寄せられる中で、貴重な情報提供ツールであるデータ放送が「借り物」のままで良いのか。

また、OTTなど映像配信事業者によるサービス活

発化に伴いディスプレイとしてのテレビ受像機の奪い合いが行われる中で、放送独自の武器を眠らせたままで良いのか。

そうした問いへの答えの一つとして、ローカルなデータ放送送出システムを導入した岩手朝日テレビの決断が参考になるはずだ。

ローカル局が下した「前進」への決断

岩手朝日テレビのデータ放送送出システム採用を評価すべき点として、「導入コストよりも機能性を重視した選択」であったことが挙げられる。

データ放送システムについては、マスター更新を担当したメーカーからより安価なシステムが提案されるのが一般的だ。価格的にはマスター付属のデータ放送システムは、独立したデータ放送送出システムの1/2～1/3程度のインシャルコストで導入できる。

ローカル局がマスター更新と併せて導入できる安価なデータ放送システムを選択するのは自然な選択

であり、事実、岩手朝日テレビ社内でも当初はその方向で検討が進んでいたようだ。

そうした流れを覆したのは、「新しいことにチャレンジしていかなければならない」という岩手朝日テレビの方針と、それを求める強い現場の声だった。

「これから先のテレビの在り方を考える中で、若手を中心とした現場はハイブリッドキャストを含むテレビとネットの融合を強く意識していました。もちろん、それら最先端サービスをすぐに展開できるわけではありませんが、そこに向かうためのベースとして今、やらなければならないと判断しました」（佐々木 貴・岩手朝日テレビ 技術局長）

「今回のデータ放送送出システムの導入は第一歩。ここからどう進むかが重要」（佐々木局長）と言うように、現時点で新設備導入に対するマネタイズが見通せているわけではない。それでも、来るハイブリッドキャストやそれを利用した4K配信などの次世代サービスへの準備として、岩手朝日テレビは大きな判断を下した。この「前進」は、同じような状況・環境にあるローカル局にも勇気を与えている。



MEDIACAST
Hybridcast ready

株式会社メディアキャストはデータ放送に必要な全ての技術を有する国内唯一のデータ放送専門会社として、過去15年にわたりNHK・民放の地上テレビ局、BS局、ケーブルテレビ局、そしてコンテンツ制作会社様へ、各種技術を提供してまいりました。

「DataCaster Cloud M3」など実績のある安定したデータ放送システムのご提供を通して、「放送局が持つ強力な武器」であるデータ放送やハイブリッドキャストによる「テレビ局の経営力強化」をサポートいたします。

株式会社メディアキャスト

東京都品川区東五反田5-25-16 HF五反田ビルディング3階

Tel : 03-5449-6701 Fax : 03-5449-6702 <http://www.mcast.co.jp/>

事例レポート

●取材・文：高瀬徹朗・放送アナリスト、渡辺 元・本誌編集長
●写真：佐々木 浩・フォトスタジオナチュラ

岩手朝日テレビ (IAT)

マスター更新に併せデータ放送送出システム導入 「これからの15年」を見据えた決断の合理性とは

全国でテレビ局のマスター設備更新が進められている中、岩手朝日テレビ (IAT) はマスターに付属されているデータ放送システムだけではなく、専門メーカーであるメディアキャストの高機能データ放送送出システムを導入して、データ放送を強化した (図2)。この取り組みはテレビ朝日系列局のみならず、系列以外のローカル局の注目も集めている。ローカル局の経営環境がさらに厳しさを増すこれからの15年間を見据えて、データ放送やハイブリッドキャスト、4K配信を見据えた岩手朝日テレビの決断と取り組みは、マスター更新を迎える全国のローカル局にとって貴重な先行事例になるだろう。

データ放送のキラーコンテンツ 「高校野球地区予選情報」を強化

「データ放送で独自の情報を発信したくてもハードルが高く、やりたいことがなかなかできない、という声は以前から社内でもありました」(尾形広人・岩手朝日テレビ 技術局技術部副部長)

岩手朝日テレビがローカルのデータ放送を送出するためのデータ放送送出システムの採用を検討するにあたり、最初に求めたのが「自由度」だった。従来

の方式はローカル局として作業負担を大幅に軽減する仕組みであった一方、テレビ朝日系ローカル局のキラーコンテンツである高校野球地方大会の情報すら、簡単に出せる状況にはなかったのだという。

一方、自由度を持つためには当然、一定の制作力が求められてくる。「これまで当社のデータ放送は、『出ていればいい』という程度の認識で提供してきたサービス。当然、制作のノウハウを持ち合わせているわけではありません。今回の採用では、どこまで我々ができるのか、を慎重に検討する必要があり

ました」(尾形副部長)。

こうした岩手朝日テレビの懸念を解消する形で提案されたのが、メディアキャストのデータ放送送出システム「DataCaster Cloud M3」だった。

メディアキャストのクラウド型 「DataCaster Cloud M3」採用

稼働中のデータ放送送出システムとしては国内最多の採用実績を誇る「M3」は、メディアキャストが



佐々木 貴

岩手朝日テレビ
技術局長



尾形広人

岩手朝日テレビ
技術局技術部副部長



村木翔太郎

岩手朝日テレビ
編成業務局編成部

テレビ局「マスター設備更新」を「次の15年」のチャンスにする



岩手朝日テレビのマスター・コントロール・ルーム。モニターには新規導入したデータ放送送出システムから送出されたデータ放送も表示されている

のコンテンツも更新されます。ネットを利用されない視聴者の方々にも情報を届けることができるようになり、サービスとして拡大した実感があります」(村木氏)。

実際、この夏から開始された岩手朝日テレビの高校野球地方大会データ放送サービスは、始めたばかりとは思えないほどに完成度が高い。

試合状況はほぼリアルタイムに更新され、対象試合を切り替えればすぐに別の球場の試合経過が表示される。決勝までのトーナメント表も掲載されており、今後の日程やカードを簡単に確認することができる。

カーソルなどの動きも快適で、表示画面もリッチに作り込まれた印象。このあたりは「M3」の機能性だけにとどまらない、メディアキャストそのものが持つノウハウが随所に感じられる部分で、早くも視聴者から好評の声が寄せられているようだ。

Lアラートとデータ放送が連携 緊急災害情報を即座に表示

東日本大震災の被災地という地域的な事情に対応した機能としては、災害情報が強化されている点も大きい。

「災害情報共有システム『Lアラート』の情報をデータ放送で提供できるようになりました。また今回のマスター更新により『Lアラート』は『DataCaster Cloud M3』経由で情報収集しL字システムへ送ることによってL字画面表示できるようになったため、災害情報は大幅に強化されたと考えています」(尾形副部長)

こうした外部情報をデータ放送に連携させる取り組みは「M3」の優れた機能性の一つで、岩手朝日テレビでは今後、市町村発信の災害情報なども含め積

極的に連携を図っていく方針だ。

加えて運用面での課題として、「放送事業者として情報を提供するだけでなく、まずは『ここに最新の情報がある』ことを認識してもらう必要がある」(村木氏)と指摘する。3.11以降、緊急災害情報への関心は極めて高い地域と言える岩手県だが、データ放送の存在自体が知られていなければ、いざという場面で選択肢にも入らない、というわけだ。

「高校野球などの注目コンテンツはもちろん、さまざまな場面で積極的にデータ放送で情報発信をすることで、『岩手朝日テレビはデータ放送を活用している』というイメージを定着させていきたい」(村木氏)。オーパレイやイベントメッセージなどによるデータ放送への誘導についても、「あくまで鬱陶しいと思われない程度のバランスで」(村木氏)積極活用していく方針だ。

本線映像サービスの視聴拡大や バナー広告事業などに期待

高校野球や災害情報のように特化した内容に限らず、データ放送に自由度を持つことができたことでさまざまなメリットを期待しているという。

「番宣バナーや番組ページの作成など、本線映像サービスの視聴拡大につなげられるいろいろな展開ができるようになりました。視聴ポイントサービスもローカルで独自に展開できるようになり、番組視聴の付加価値を高めることができています」(尾形副部長)

ローカル時間帯の自社制作番組と連動した視聴ポイントの付加サービスはこれまでもあったが、独自企画や技術的制御などが行えないなどの制限があ



更新後の新しいマスター装置 (NEC製)



メディアキャストのデータ放送送出システム「DataCaster Cloud M3」の送出装置など。運用機能はAWSのクラウド上にある

った。今後はこれらの制限などがなくなり、岩手朝日テレビ独自のポイント企画を自由に行えることになったのは、視聴者サービスの観点からも大きなメリットと言えそうだ。

もう一つ、岩手朝日テレビが高い意欲をもって用意したコンテンツが「絵合わせゲーム」だ。いわゆる神経衰弱ゲームだが、その絵柄には自社マスコットキャラである「ゴエティー」を採用。12パターンのポーズをとる24組のマスコットキャラの絵柄を合わせる神経衰弱で、やり始めると癖になる。放送局としての独自性を出しつつ、視聴者がdボタンを押すきっかけとしても期待されるコンテンツだ。

また、マスコットキャラがLINEスタンプとして一般販売されていることを踏まえ、スタンプショップに

つながるQRコードを掲載。「ゲームを楽しんでいた
だき、キャラクターに興味を持てただけなら
LINEスタンプもあるよ、という形を作りたい」
(村木氏)と、ビジネス的な要素も持たせている。

「将来的には、ゲーム画面に表示するバナー広告
などの広告営業と絡めた展開を目指していければ」
(村木氏)と、さらなるビジネスの発展にも積極的だ。

将来のハイブリッドキャストや 4K配信のベースとなるシステム

「M3」の導入目的の一つに「将来のテレビ・ネット
連携の発展を踏まえて」が挙げられていたことから
もわかるとおり、データ放送上でのさまざまな取り
組みを今後、ハイブリッドキャストを含めたより高度
な放送・通信連携へとつなげていくことが岩手朝日
テレビの最大の狙いだ。現在岩手朝日テレビが運用
している「M3」にはハイブリッドキャスト機能は搭
載されていないが、「M3」はハイブリッドキャスト
機能やそれを使った4K配信など必要な機能を追加で
きる仕組みになっている。

「今回整えたのは、あくまでデータ放送システムで
あり、将来に向けたベースとなるシステム。ここで積
み重ねるさまざまな経験が近い将来、ハイブリッドキ
ャストや4K配信など次世代サービスへのスムーズな
移行につながっていくと考えています」(尾形副部長)

ハイブリッドキャストの検証については、テレビ朝
日をはじめキー局・準キー局で各種進められている
が、「全国区のサービスが確立されていく一方で、
ローカル局独自の、ローカル局らしい活用方法もあ
るはず。そうしたサービスのヒントをつかんでいくた
めにも、まずはデータ放送でさまざまな取り組みに
チャレンジしていきたい」(尾形副部長)。

そうした将来目標を掲げる中で、今回、メディア
キャストとつながりができたこと自体をメリットと捉
えているようだ。

「メディアキャストが最先端技術の検証に多く関わっ
ていることに加え、これまでのデータ放送、そしてハイ
ブリッドキャストを支えているという事実は心強い。自
分たちに何ができるのか、を考えていく中で頼れる相
手であり、こういうことができる、というのを提案して
いただけることも期待しています」(尾形副部長)

専門メーカーが提供する 局の事情に応じたサービス

実際、今回の「M3」導入において、メディアキャ

ストは「システムの販売・提供」以上のメリットを岩
手朝日テレビにもたらしたと言える。

テレビ朝日系列の非連動データ放送画面は、テレ
ビ朝日メディアブックスが制作したテンプレート画
面だが、メディアキャストはそのBMLデータをベー
スとした形で岩手朝日テレビのローカルデータ放送
サービスを実現しており、ユーザインターフェイスを
旧来サービスと大きく変えることなく高度化したサー
ビスを視聴者に提供できている。

また、更新されたNEC製マスター / データ放送で
連携している可変ビットレート機能を活かしたデー
タ放送表示の高速化も実現。「従来はdボタンから表
示まで10秒程度かかっていたので、大きな改善。ま
た提供する情報データが増えたことで表示遅延を懸
念していましたが、可変ビットレート機能等を駆使、
NEC殿、メディアキャスト殿のご協力により、設定
をチューニングした結果、懸念は解消されています」
(村木氏)と、サービスとしての機能性向上にも大き
く寄与している。

こうした導入先の事情に応じたシステム・サービ
スの提供は、長くデータ放送を支えてきたメディア
キャストの大きな魅力だ。先の高校野球情報画面や
絵合わせゲームなどを含め、これまで蓄積してきた
知見とノウハウを惜しみなく提供している。

「これまでデータ放送にほとんど触れてこなかった
我々をこうした方針に導いてくれたのは、メディアキ
ャストの存在あってこそ。データ放送に取り組む上
で、ハードルを大きく下げてくれました」(村木氏)

岩手朝日テレビの取り組みが 全国のローカル局に与える刺激

岩手朝日テレビのデータ放送送出システムの整備
は、同じような環境にある系列局、また他系列のロ
ーカル局にも刺激を与えているようだ。

「平成新局の岩手朝日テレビは地域でも一番若く、
チャレンジしやすい環境にあったと思います。こうし
た我々の取り組みが、いい意味でのリードオフマン
になれば」(佐々木 貴・岩手朝日テレビ 役員待遇
総務・技術担当 技術局長)

高校野球速報や災害情報などについて、これから
マスター更新を迎える系列局などから高い関心を寄
せる声も挙がっているという。

「系列内の運用ガイドラインの中での展開ですが、
これまで独自のデータ放送を展開してきたのは
キー局と準キー局だけ。ここに岩手朝日テレビが加
わったということで注目されているので、しっかりと



岩手朝日テレビの強化後のデータ放送トップ画
面。津波情報、地震情報など災害情報も充実さ
せた



カラーコンテンツ「高校野球地区予選情報」のト
ーナメント情報。本線映像サービスの視聴拡大
効果も期待されている



各球場で同時開催されている高校野球地区予選
のスコア。岩手朝日テレビのWebサイトと連動
して、得点がリアルタイムで更新される



岩手朝日テレビが力を入れて制作・運営してい
る「絵合わせゲーム」。視聴者がdボタンを押す
きっかけになることを狙う。マスコットキャラの
LINEスタンプ販売と連携。将来的なバナー広告
展開など、新事業の開発も見据えたサービスだ

『できる』ことを示していきたい」(同)。

岩手朝日テレビの挑戦が系列局、そして全国のロ
ーカル局全体にどのような影響をもたらすのか。今
後も期待して見守りたい。

